

南岳遭難(1997年10月)

南岳小屋から、道ではなく、ハイマツ帯を歩いてしまった。理由は分らない。ハイマツ帯は急なガレ場となった。「あれっ、おかしいぞ」と思ったが、古いロープが現われそれを伝わって下り続けた。断崖絶壁の上に行き着き行動を停止した。気づくと登るのも下るのも不可能になった。



解説

道ではなく、ハイマツ帯を歩いてしまう。理由は分らない。これが、道迷いの不思議だ。急なガレ場の下りになっても、古いロープが現われたため、滑り落ちるような急斜面を下ってしまう。「おかしい、やっぱり変だ。」「でも、もうちょっと下ってみよう」この繰り返しで更に深みにはまってしまう。槍平までは標準タイム3時間。しかし、3時間過ぎても標高は高いままだ。断崖絶壁が現われ、行動を停止した。ここまで来て、やっと道に迷ったことを悟ったのだ。ビバークを決め、動かない判断をする。その夜から吹雪になった。十分なビバークの体制をとったが、気温はマイナス10度近くになる。翌日も天候が悪くヘリが飛ばせない。遭難3日目、4日目、ヘリは飛んだが気づいてもらえない。遭難5日目、やっとヘリが遭難者を見つけ救助した。救助隊の誰かが、「まさか」と声を上げて喜んだ。

「道の標識を確認しているんだから、ハイマツ帯の中を行っても同じだろうと考えちゃったのかなあ」と本人は語る。自分の行動が説明できず、戸惑っていた。遭難者は、道に迷っても仕方がない行動をとってしまう。それが道迷いなのだ。八方塞がりになって、自分の行動に気がつく。「時すでに遅し」である。